

『卒都婆小町』の小町はどこに行こうとしていたのか

京都造形芸術大学
舞台芸術研究センター所長 天野 文雄

現在上演されている南北朝制作の「古作」の能はその後の能芸の急速な洗練のためであろう、後人とりわけ世阿弥によって改訂されていることが多い。その場合は曲名も変わるものが少なくなく、たとえば改作もふくめた観阿弥の作についていえば、『嵯峨の大念仏の女物狂の物まね』（あるいは『嵯峨物狂』）は「百万」となり、『静が舞の能』は「静」さらには「吉野静」となり、『四位少将』は「通小町」となり、『小町』は「卒都婆小町」となる、というぐあいである。

一方、世阿弥によって改訂されながらも、曲名が変わらなかったものに「自然居士」がある。これらの改作前の形がどのようであったかについては、戦前以来の研究の蓄積があるが、この性格上、どうしても推測にたよらざるをえない部分があるため、総じて十分な解明にまでは至っていないことが多い。本日の「卒都婆小町」もそのひとつである。

世阿弥による『卒都婆小町』の改訂については、『申楽談儀』十四条「能書くやう」の、

小町、昔は長き能なり。「過ぎゆく人は誰やらん」と云て、なをなを謡ひしなり。後は、そのあたりに玉津島の御座あるとて、幣帛を捧げければ、御先となりて出現あるていなり。これをよくせしとて、日吉の烏大夫といはれしなり。当世、これを略す。

という記事が知られている。これによると、本来の『卒都婆小町』は、現在は「鳥羽の恋塚秋の山、月の桂の川瀬舟、漕ぎゆく人は誰やらん」で終わっている前場の小町の都からの道行がさらに続く「長き能」であったこと、後場には玉津島明神の使わしめの鳥が登場する場面があったことが知られる。「卒都婆小町」の改訂の実態については、この記事をふまえ、小町の道行は都からどこまでだったのか、つまり小町が高野山から出た僧と出会って卒塔婆問答が行われる本曲の舞台はどこなのか、鳥はどのあたりで登場したのか、その鳥は玉津島明神の「御先」だというが、なぜ玉津島の御先が登場した

のか、といったことが問題になっていて、それぞれに貴重な指摘がなされているのだが、ここでは、従来、あまり顧みられていない問題、そもそも小町は最終的に都からどこに行こうとしていたのかを考えてみたい。それは「卒都婆小町」をトータルに捉えるためにも不可欠の作業だと思うからである。

その前に、まず「卒塔婆問答」と小町の狂乱からなる「卒都婆小町」の舞台がどこかについて確認しておこう。これについては、シテ方やワキ方の詞章から摂津の阿倍野と山城の鳥羽の二つの可能性が指摘されていたが、その場所は小島明子氏の「卒都婆小町」の舞台「（かんろう）二八〇、平成三年」が指摘するように、まずは阿倍野とみてよいであろう。小町の道行は現在では金春流以外の四流では「漕ぎゆく人は誰やらん」で終わっているが、金春流では、そのあとに「これはや津の国阿倍野の松原とかや申し候」とある。金春流の古台本も同様である。一方、その前に登場しているワキ僧の（着キゼリフ）は、ワキ方の流儀によって鳥羽とするもの（福王流）と阿倍野とするもの（下掛り宝生流、高安流）がある。これだといずれが正しいのかはかんたんには決めたいが、小島明子氏は、『奥義抄』「俊頼髓籠」「東野州聞書」「古今著聞集」などが阿倍野に近い住吉社の第四神の神功皇后を玉津島明神だとしていることに着目して、『卒都婆小町』の舞台を阿倍野としたのであった。古態を残していることが多い金春流が、古来、小町の道行を阿倍野までとしていることも勘案すれば、『卒都婆小町』の舞台はまず阿倍野とみてよいであろう。とすれば、『申楽談儀』の「なをなを謡ひしなり」は、鳥羽から阿倍野までの道行をさしていることになる（新潮日本古典集成「謡曲集」では、「卒都婆小町」の舞台も道行の最終的な目的地も高野山とするが、ここではそれは採らない）。

しかし、阿倍野は「卒都婆小町」の舞台ではあるが、都を出た小町の目的地ではない。そのことは、「漕ぎゆく人は誰やらん」のあと

の小町の「あまりに苦しい候ふほどに、これなる朽木に腰をかけて休まばやと思ひ候」という言葉にも明らかである。これはとうてい目的の場所に着的いたときの言葉とは思えないからである。しかれば、小町はどこに行こうとしていたのだろうか。

ここで想起されるのが、同じ小町をシテとする『鸚鵡小町』である。近江の関守辺で老残の日々を送っていた小町が、かつての関秀歌人らしく帝からの歌にみごとな鸚鵡返しで返歌をしたあと、使者の新大納言行家から、「いかに小町、業平玉津島にて法楽の舞をまなび候へ」と言われ、〈物着〉後に、「さても業平玉津島に参りたまふと聞こえしかば、われも同じく参らんと、都をばまだ夜をこめて稲荷山、葛葉の里もうら近く、和歌吹上にさしかかり」と諷つて〈序ノ舞〉にかかり、かつての玉津島玉前での舞が再現されるのだが、ここで注目されるのは、小町が玉津島明神に参詣したという設定である。玉津島は祭神が稚日女尊、息長足姫尊(神功皇后)、衣通姫尊の三柱、古来、住吉、北野とともに和歌三神の一として歌人の敬仰篤い神社であった。玉津島三神の一柱の衣通姫は允恭天皇の皇女で、その名は肌の美しさが衣を通すほどだったことに由来するという。

『古今集』の貫之の序によれば、歌人としての小町はその衣通姫の流れだとされ、そのことは世阿弥の『関寺小町』にもみえている。また、世阿弥の『蟻通』は貫之が玉津島明神に参詣しようとする途中、貫之の詠歌よつて蟻通明神が感応することを描いているが、歴史的にも有力歌人が玉津島に参詣した例は少なからず知られてもいる。

要するに、小町にとっては衣通姫が祀られる玉津島明神はとりわけ敬仰される神なのであり、その点、若き日に業平とともに玉津島に参詣して法楽の舞を舞ったという『鸚鵡小町』の設定はきわめて自然だといえるのである。

もっとも、小町が業平と玉津島に参詣したことは『鸚鵡小町』のほか狂言の『業平餅』や『歌仙』にもみえるが、その他の文献には所見がない。さほど古い狂言ではないらしい『業平餅』と『歌仙』の設定は『鸚鵡小町』の影響下にあるとして、それでは『鸚鵡小町』の設定は何に拠るのかといえ、それは『卒都婆小町』だったのではないかと思う。現に『鸚鵡小町』の「都をばまだ夜をこめて」は『卒都婆小町』の「都

は人目つつましや、もしもそれかと夕まぐれをふまえたものと認められる。つまり、『鸚鵡小町』の作者は、『卒都婆小町』の小町が摂津の阿倍野を経て向かおうとしていたのは、和歌三神の一で、衣通姫が祀られている玉津島明神だと理解していたらうということである。もちろん、それは現在の『卒都婆小町』には記されていないことであり、改作前の『卒都婆小町』に記されていたかどうか不明だが、そこには小町が阿倍野経由で向かおうとしているのは、当然、玉津島だという理解がふまえられていたように思う。また、『鸚鵡小町』では、なんの説明もなく当然のように、小町は業平とともに玉津島に参詣したとしているから、右に推測しような『卒都婆小町』の設定は、同曲における創作ではなく、そうした伝承がすでに存在していたことを思わせる。とすれば、『鸚鵡小町』の設定はそのような伝承と『卒都婆小町』をふまえたことなるのであろう。また、『業平餅』と『歌仙』にも同様の事情を考えることもできよう。

小町が最終的に行こうとしていたのが玉津島であるとすると、改作前の『卒都婆小町』に玉津島の使わしめである鳥が登場していることが納得されるし(玉津島の使わしめが鳥であることを示すものは現在のところ知られていないが、近世の『住吉相生物語』には住吉社の使わしめとして鳥がみえる)、小町が四位の少将の霊の憑依によって狂乱したあと、「これにつけても後の世を、願ふぞまことなりける、砂を塔と重ねて、黄金の膚こまやかに、花を仏に手向けつつ、悟りの道に入らうよ、悟りの道に入らうよ」と彼女の成仏が暗示される結末も、現在の舞台ではなんとなく唐突な印象を受けるが、それを狂乱のあと、近くの住吉社にも祀られると考えられていた和歌の神、玉津島の使わしめが来現したことによるとするならば、まことに自然な展開といえる。

かくて、『卒都婆小町』は歌人小町が和歌の神で自身もその流れを汲む衣通姫が祀られる玉津島参詣を志して、都から玉津島に向かい、その途中の阿倍野で高野山から出た僧に行きあうという設定のなかに、小町が高野僧を論破する『卒塔婆問答』と小町の狂乱という正反対の場面を配し、そこに「煩惱即菩提」という禅思想をテーマとしてうち出した作品と把握できるのである。